

中嶋 嶺雄さん

日本の大学は、果たして国際競争力を持っているのでしょうか。少なくとも国際的な知的領域では疑問ですね。二十一世紀の日本にとって重要なことは知的な国際貢献だと思つていますが、拠点となるべき大学の現状をみると、このままではいいのかという思いにかられます。

知の国際貢献

日本社会はすべてにおいて縦割りなんです。官僚機構にしても、大学にしても。若者たちは大学を人生設計の中で選んでいるのではなく、だいたい偏差値で決めたりしている。一度その大学に入ると自分の個性と合わない分野でもやり続けることになる。その辺を徹底的に切り開くことがいま必要なんです。

一橋大学と東京工業大学、東京医科歯科大学、東京外国語大学は

山ろく清談

「大学連合」を組む予定です。東京外大は、学内討議を重ねて来年四月スタートの大学連合への参加を首肯しています。

それぞれ専門性が高く伝統もある国立大学で、協力し合えば共働効果が出る。一つの大学ではやりにくい複合領域や学際的な領域の運営を担ったり、編入生や複数学位取得を可能にし、博士論文の共同審査をするとか……。いろいろな可能性を探つと、学長同士で将来の歩を踏つたのが発端です。東京大学などいわば旧帝大と違った専門性と相互補完性を持った国際的な存在になるはずなんです。

これまでの国立大学は競争原理が入らず、一度助手に採用されればそのまま教授になれるなど、ぬるま湯の中で過ごしてきました。でも世界は、もっと速った競争の中で動いています。日本の大学、特に国立大学は、もっと競争力向上式でやっていく時代じゃないですか。



東京外国語大学長。国立大学協会副会長、文部省大学審議特別委員などの立場で大学改革に取り組み。松本市出身。64歳。同市神田の自宅「望岳山荘」で。

“壁”を破る4大学連合

少子化が進んでも、高等教育はますます重要になります。社会人の再教育とか留学生の受け入れとか、対応によって非常に可能性が広がる。一方で、工夫しないですと志願者も減まらなくなっていく

まっ。だから、国立大学を従来の国の組織から切り離し、法人格をもたせる独立行政法人化は、本当にやる気のある大学、個性的な大学にとってはむしろチャンスです。

私が国際事務総長を務めているアジア太平洋大学交流機構（UIM AP）は、アジア太平洋地域全体で単位互換を進めようとしていますが、国内だけでなく国際的にも大学の壁を低くしようとしています。

なんです。全世界から留学生を受け入れていくことも大事な国際貢献です。日本への留学は壁が高い。これを壊していかなければ、アジアの優秀な学生がさらに米國などに流れてしまつ。なにもお金（円借款など）とか、PKO（国連平和維持活動）とかだけでなく、知的なレベルの国際貢献が大事だと思つてます。

「民の時代」へ

二十一世紀は、グローバル化の時代といわれるように国境がどんどん低くなります。人の交流にしても、経済にしても、IT（情報技術）革命にしても、国家というより民間が主役。二十世紀は「公の時代」でしたが、二十一世紀は「民の時代」です。公の時代は結局、国が主導しますから、そこに力が介在し、非人間的な状況も生じる。社会主義や開発独裁がそ

その教養が先回帰ってきて、今度は国連の活動に参加するものでニューヨークに行くことになってました。私たちの時代には考えられなかつた挑戦ですよ。ものすごく大きな世界で生きている。大学は、そうした若者を育てたいんです。それが国際貢献だと思つてますよ。